

press release

2010年7月5日

*以下は2010年6月28日にスウェーデン・ストックホルムで発表したりリースの抄訳です。

マース ペットケアとウォルサム研究所、 人と動物の関係に関する国際会議のゴールドスポンサーに

マース インコーポレイテッド(本社:米国バージニア州、CEO:ポール・S・マイケルズ、以下「マース」)のペットケア事業部門であるマース ペットケアは、同社のウォルサム研究所と共に、2010年7月1日から4日までスウェーデンのストックホルムで開催される国際会議「People & Animals: For Life(人と動物:生活のために)」のゴールドスポンサーを務めることを発表しました。

「People & Animals: For Life(人と動物:生活のために)」と題した本会議は、人と動物との相互作用に関する世界でも影響力のある学術イベントであり、IAHAIO(人と動物の関係に関する国際組織)の主催で、3年に1度開催されています。世界各国の著名な研究者が一堂に会し、コンパニオンアニマルが人間に与える影響に関する最新の研究発表ならびにディスカッションを行います。

12回目となる本大会は、スウェーデンのエスキル・エーランソン(Eskil Erlandsson)農相が開幕を宣言し、「人と動物との相互作用に関する多文化的視点」「動物介在介入(ペットを利用した治療プログラムの効果に関する研究)」「ペットと人間の健康」など、100以上の研究が発表されます。事前に公表された研究報告の抄録によると、ペットが人間や社会のさまざまな分野において、好ましい影響をもたらすことが明らかになりました。

本会議における発表内容の主なものは以下になります。

- 犬を飼うと、歩く時間が週に30.8分増えた。
- 人との接触が苦手な子供は、社会的なストレスの中で、人なつこい犬が側にいると落ち着きをみせる一方、親切な人間では犬のようにはいかなかった。
- 肥満の人がシェルターの犬を散歩するプログラムを実施した結果、運動量が大幅に増加した。自分ではなく犬に意識を向けたことにより意欲が高まったものと考えられる。
- 視覚や触圧覚など感覚による犬と飼い主の交流は、短い交流でも双方のホルモン値や心拍数に変化を与えた。
- 犬と飼い主、双方のオキシトシンやコルチゾールの値は、飼い主が犬に対して持っている肯定的あるいは否定的感情に関する調査の回答と強い相関があった。

マースペットケア、欧州ペットケア部門コーポレート・アフェアーズ・ディレクターのRobert Kaczmarekは次のように述べています。「マースは、ペットが私たち人間の生活に多大な恩恵をもたらしてくれることを固く信じています。当社は30年以上にわたり、人と動物との相互作用に関する研究に取り組んでいます。最近では、ペットが人間に与える恩恵に対する認知や理解がますます広まっています」。

マースペットケアとウォルサム研究所は、IAHAIO主催のすべての国際会議でスポンサーを務めるなど、30年以上にわたり、人間とコンパニオンアニマルの分野に対する幅広い支援を行っています。マースペットケアとウォルサム研究所は、引き続き、人と動物との相互作用に関する研究をサポートしてまいります。

会議の内容や報道資料についての詳細は、本会議のウェブサイトwww.iahaio2010.comをご覧ください。

以上

マース インコーポレイテッドについて

マースは、世界でも有数の菓子、食品・飲料、ペットケア&ペットフード事業を展開している非上場企業。創立は1911年、本社は米国バージニア州マクレーン。世界79カ国以上で事業を展開し、その製品は180カ国以上で販売されている。総従業員数は65,000名以上、2008年度の世界における年間総売上高は280億米ドル。M&M'S®、スニッカーズ®、ミルキーウェイ®、マース®、アンクルベンズ®ライス、リグレーなどの菓子や食品、ペディグリー®やウィスカス®を始めとするペットケア&フード製品など、多くの世界的ブランドを持つ。またマースはカカオの調査研究におけるグローバルリーダーとして、その研究成果は持続的なカカオ栽培の発展に貢献してきた。また、「品質」、「責任」、「互恵」、「効率」、「自由」というマース独自の価値観を五原則として設定し、事業運営や行動指針としている。

マースのホームページは、www.mars.com

マース ジャパン リミテッドについて

マース ジャパン リミテッドは1976年に設立、ペットフード事業、スナック菓子事業、ドリンク事業を展開している。主軸事業のペットフード製品ではペディグリー®、カルカン®ウィスカス®、シーザー®、シーバ®、パーフェクトフィット®、グリニーズ®等のトップブランドを持つリーディング企業。国内従業員数は約250名。

<http://www.marsjapan.co.jp>

*IAHAIOより発表された、本会議に関する主要プレスリリースの日本語訳を別紙にて送付いたします。ご参考ください。



12TH INTERNATIONAL CONFERENCE
ON HUMAN-ANIMAL INTERACTIONS
PEOPLE & ANIMALS – FOR LIFE

2010年7月1日 スウェーデン・ストックホルム発

ペットに対する意識、その文化的相違

スウェーデンのエスキル・エーランソン (Eskil Erlandsson) 農相は7月1日、ストックホルムにおいて、人と動物との相互作用に関する世界最大の会議「People & Animals: For Life」の開幕を宣言しました。スウェーデンの首都ストックホルムで開催されるこの会議では、世界各国から著名な科学者が参加し、本分野における最新の研究成果を発表しました。会議では、ペットに対する意識の文化的相違というテーマで、動物および動物保護に対する意識について12カ国を対象に調査した最新の比較研究の結果が発表されました。また、コンパニオンアニマルと子供との関係に文化的要素が与える影響を明らかにした研究も報告されました。

人と動物との相互作用に関する会議「People & Animals: For Life (人と動物：生活のために)」が開幕しました。4日間にわたるこの会議には、世界各国から約800名が参加しました。本会議は、コンパニオンアニマルが人間に与える影響に関するグローバルな経験や知識を交換することを目的としています。

本会議を主催するスウェーデンのManimalisのUlla Björnehammar会長は、「本会議はこの分野で他に例を見ないもので、ペットが私たち人間やその社会に与える影響に関する世界中の知識や情報が結集する場となります」と述べました。

初日の全体会合では、IAHAIO (人と動物の関係に関する国際組織) 会長のデニス・ターナー (Dennis Turner) 博士が演壇に立ちました。今日、西洋諸国で行われている動物保護運動を他の地域に広めようとする場合、宗教的・文化的な相違点が考慮されることはほとんどありません。ターナー博士は、宗教的伝統の異なる12の国の都市部における成人の意識について調査し、ある国に住んでいた人が他の国に移住した場合、時間とともにその意識に変化が生じるかどうかについて評価検討をしました。また、西洋の論理ではなく「現地の」論理を用いることが、動物保護の目的を達成するための近道であることについても論じました。

また、この研究の共同研究者であるワシントン大学のBrinda Jegatheesan教授は次のように述べました。「世界が日々狭くなっていく中、動物に対する意識の文化的相違について研究することが極めて重要になっています。この点に関する理解を深めることによって、動物保護の問題を考えると、また人類に大きな恩恵をもたらすコンパニオンアニマルのプログラムを推進する場合にも、物事を効率的に運ぶことができるのです」。

Brinda Jegatheesan教授はこの他にも、ペットとの関わりを通じて子供の思いやりの気持ちを育てる場合に、さまざまな文化圏でどのようなしつけや社会化が行われているかについて論じた異文化間の比較研究の成果を、仲間の研究者と共に発表しました。この研究では、子どもとペットの関係を育くむ上で、親や高齢者が重要な役割を果たすことが明らかにされています。ペットが関わるしつけの方法は多様であるものの、異なる文化圏に属する親でも、向社会的行動を育くむことにおいては同様の目的を持っていることがわかりました。

以上

*本資料はIAHAIOより7月1日に発表されたリリースの日本語訳です。

(日本語訳監修：麻布大学 獣医学部 教授 太田光明/提供：マース ジャパン リミテッド)



12TH INTERNATIONAL CONFERENCE
ON HUMAN-ANIMAL INTERACTIONS
PEOPLE & ANIMALS - FOR LIFE

2010年7月3日 スウェーデン・ストックホルム発

ペットは地域社会にとって重要な存在

「コンパニオンアニマルは社会全体に影響を及ぼす」というテーマに取り組んだ2つの研究が、人と動物の関係に関する国際会議「People & Animals: For Life」で発表されました。

オーストラリアの研究者グループは、7年にわたって、ペットが近隣や地域住民の交流にどのような影響を与え、交流の促進に役立っているのかについて調査を行いました。この調査はペットオーナーと非オーナーの両方を対象としたものです。従来の研究の多くは、ペットとの交流から生じる「1対1」のメリットに注目したものでしたが、近年、私たちの生活や地域社会にペットが存在することによって、社会や人間関係にどのような変化が現れるかについて関心が高まりつつあります。

研究者たちは、ペットが社会的な接触や交流の潤滑油としての役割を果たしていることを発見しました。ペットは、ペットオーナーと非オーナーのいずれからも会話のきっかけとなるとされており、人が地域社会に加わって活動することを促す要因となっています。ペットオーナーは隣近所との付き合いが多く、地域の活動にも積極的に参加し、社会資本（ソーシャル・キャピタル）の水準も高い傾向があります。ペットと社会的交流や社会資本との間に関連性があることは、ペットの影響が飼い主や近隣だけにとどまらず、より広範囲の地域社会にプラスの波及効果が生まれることを意味しています。

西オーストラリア大学のリサ・ウッド (Lisa Wood) 教授は、「私たちの研究で収集した資料の多くは、世界中の多くのペットオーナーのエピソードが真実であることを裏付けています。政策当局は、地域社会や社会資本の崩壊を懸念するならば、ペットの果たす役割にもっと関心を寄せるべきだと思います」と述べました。

英国では、件数は少ないものの、飼い主の管理不履行による事故が発生していることや、犬嫌いの人々からの強い要請がきっかけとなり、犬の飼い主による散歩中の迷惑行為がなぜ起きるのかについて研究者グループが調査を行ない、飼い主の行動を改善するためのより公平で効果的な方法を編み出しました。

2組の研究者たちは、応用心理学的手法を用いて、犬の飼い主の基本的な行動、社会的影響、制御法を調査しました。その調査結果をもとに、犬の散歩時に起きる問題を極力少なくするために、人と動物の絆を利用した地域ごとの革新的な活動がいくつか開始されました。

その結果、散歩中の糞の放置は82%減少し、犬が草食家畜を襲う事故はなくなり、不慮の事故は大幅に減少しました。犬の飼い主とそれ以外の地域住民の結びつきが強まり、犬の飼い主はそれまでの行動を改めたため、社会の好ましい一員として認められるようになりました。

犬の飼い主の行動を改めさせる方法について、「People & Animals: For Life (人と動物: 生活のために)」の場で発表が行われました。「People & Animals: For Life (人と動物: 生活のために)」はコンパニオンアニマルと人間および社会との関係をテーマにした世界最大の会議です。本会議は3年に1度開催され、スカンジナビア地域での開催は今回が初めてとなります。

以上

*本資料は IAHAIO より発表されたリリースの日本語訳です。

(日本語訳監修: 麻布大学 獣医学部 教授 太田光明/提供: マース ジャパン リミテッド)



12TH INTERNATIONAL CONFERENCE
ON HUMAN-ANIMAL INTERACTIONS
PEOPLE & ANIMALS – FOR LIFE

2010年7月4日 スウェーデン・ストックホルム発

ヘルスケア分野で拡大するペットの利用

ペットの中でも、特に犬は介護分野での利用が世界中で一般化しています。また、特定の病気の治療にペットが重要な役割を果たすようなプロジェクトも、スウェーデン国内だけでなく世界各国で続々と始まっています。「People & Animals: For Life」の最終日には、こうしたプロジェクトが特に大きな成功を収めている例をいくつかまとめて取り上げました。中でも、動物介在介入（AAI）は、注意欠陥多動性障害（ADHD）の若年者や脳卒中患者のリハビリ支援に好ましい成果を上げています。

世界各国で、患者に動物介在介入を何らかの形で取り入れる医療機関が増えています。ドイツで行われた調査では、動物介在介入を実施している小児科の数を調べるとともに、主任医師にその治療効果について尋ねました。調査対象となった229の医療機関のうち、動物介在介入を通常の治療に組み入れていると答えたのは38に過ぎませんでした。それにもかかわらず、回答者の90%近くが、動物介在介入は患者に対してプラスの効果があると答えました。また58%が、動物介在介入を用いると親にもよい影響が現れることがあると回答しています。動物介在介入実施の障害として挙げられたのは、衛生上の問題や管理の増大、アレルギーでした。

Manimalis 代表の Ulla Björnehammar 氏は、「スウェーデンでは、訓練された犬を高齢者介護に利用するために熱心な取り組みを行ない、導入を成功させました。今後は、困難を抱えている子供たちのためにペットがどのように役立つかを考える時期に来ています」と述べています。

一方、ノルウェーでは、脳卒中患者のリハビリに動物介在介入がどのように役立つかを解明する研究が行われました。オスロ郊外にある病院で21名の患者が犬を用いた6週間の実験に参加し、各患者は、週3回、15～20分間犬とふれあいました。その結果、患者が落ち着きを見せるようになったと判断され（脳卒中発作後の患者は根拠のない不安に襲われることが多い）、患者や看護師、セラピストのいずれもが治療継続に前向きな姿勢を示しました。

デニス・ターナー博士（スイス）は、「科学的に根拠のある方法は、政策当局にとって意思決定の拠り所となります。だからこそ、この会議はさまざまな疾患を持つ人々にとって希望の光となるのです。ストックホルムで行われる4日間の会議のためにこのテーマに関する世界の英知が結集したということは、私たちが現在取り組んでいる活動やプロジェクトをさらに発展させ改善していくことができるということでもあります」と述べています。

オーストラリアでは、教室内でモルモットを利用したプロジェクトを実施し、自閉症スペクトラム障害（ASD）の生徒に対して好ましい成果を上げました。ASDを患う生徒にとって教室という環境は辛いものである場合があります。そこで研究者たちは、8週間にわたって1教室あたり2匹のモルモットを使い、生徒の積極的な社会的行動を促す実験を行ないました。5歳～12歳のASDの生徒1人と通常の発達を示す生徒2名からなる各グループに、週2回各30分のセッションを実施しました。セッションでは、動物のさまざまなニーズを理解し、世話ができるようになることに重点を置きました。親と教師によるプロジェクトの検証を経て、研究者たちが出した結論は、教室における問題への対応策として、モルモットの利用はコスト・パフォーマンスの高い方法であり、生徒の積極的な社会的行動が大幅に増加した、というものでした。

「People & Animals: For Life（人と動物：生活のために）」はコンパニオンアニマルと人間および社会との関係をテーマにした世界最大の会議です。本会議は3年に1度開催され、スカンジナビア地域での開催は今回が初めてとなります。

以上

*本資料は IAHAIO より発表されたリリースの日本語訳です。

（日本語訳監修：麻布大学 獣医学部 教授 太田光明/提供：マース ジャパン リミテッド）

参考資料

People & Animals: For Lifeについて

「People & Animals: For Life（人と動物：生活のために）」は、スウェーデンのストックホルムで2010年7月1日から4日まで開催されました。今回が12回目となるこの国際会議は、ペットが人間や社会に与えるメリットに関する研究成果を広める場としてIAHAIO（人と動物の関係に関する国際組織）が開催しているものです。これまでに東京（2007年）、グラスゴー（2004年）、リオデジャネイロ（2001年）の各都市で開催された会議には、世界各国からこの分野の著名な研究者や代表者が参加しています。詳細は公式ホームページ IAHAIO2010.comをご覧ください。

Manimalisについて

Manimalis はペットが個人と社会に与える明確な経済的、心理的、生理学的メリットに対する認知を高めることを使命とする独立非営利団体です。Agria Djurförsäkring、およびドッグフード「Pedigree®」やキャットフード「Whiskas®」などのブランドを有するペットケア会社 Mars AB がスポンサーを務めています。Manimalis は、スウェーデン農業大学、スウェーデンケネルクラブ、全国動物園飼育員団体（Zookeepers National Organization）などの組織と緊密に連携して活動しています。Manimalis は国際的組織 IAHAIO（人と動物の関係に関する国際組織）のスカンジナビア代表です。詳細は www.manimalis.se をご覧ください。

*本資料は IAHAIO より発表されたリリースの日本語訳です。

（日本語訳監修：麻布大学 獣医学部 教授 太田光明/提供：マース ジャパン リミテッド）